

国立天文台・天文情報センター・アーカイブ室 中桐正夫

* 1号官舎の三鷹市文化財指定書の修正文書届く

大正4年に建設された東京天文台官舎1号は、平成21年(2009年)5月19日付で三鷹市登録有形文化財1号に指定されている。そのことについてはアーカイブ室新聞193号(2009年6月8日発行)で述べてある。その記事は、三鷹市登録有形文化財指定書が届いたということで書いたものである。ところがその指定文書には「建物は、天文台の台長が住む宿舎として、大正4年(1915年)に建設されたもので、云々・・・」と書かれていたのである。1号宿舎は高等官官舎として建てられたもので、台長官舎は14号官舎としてずっと後に建てられている。この誤りを修正してほしいと申出てやっと修正された文書が2010年3月3日に届いた。写真1が修正された書面である。

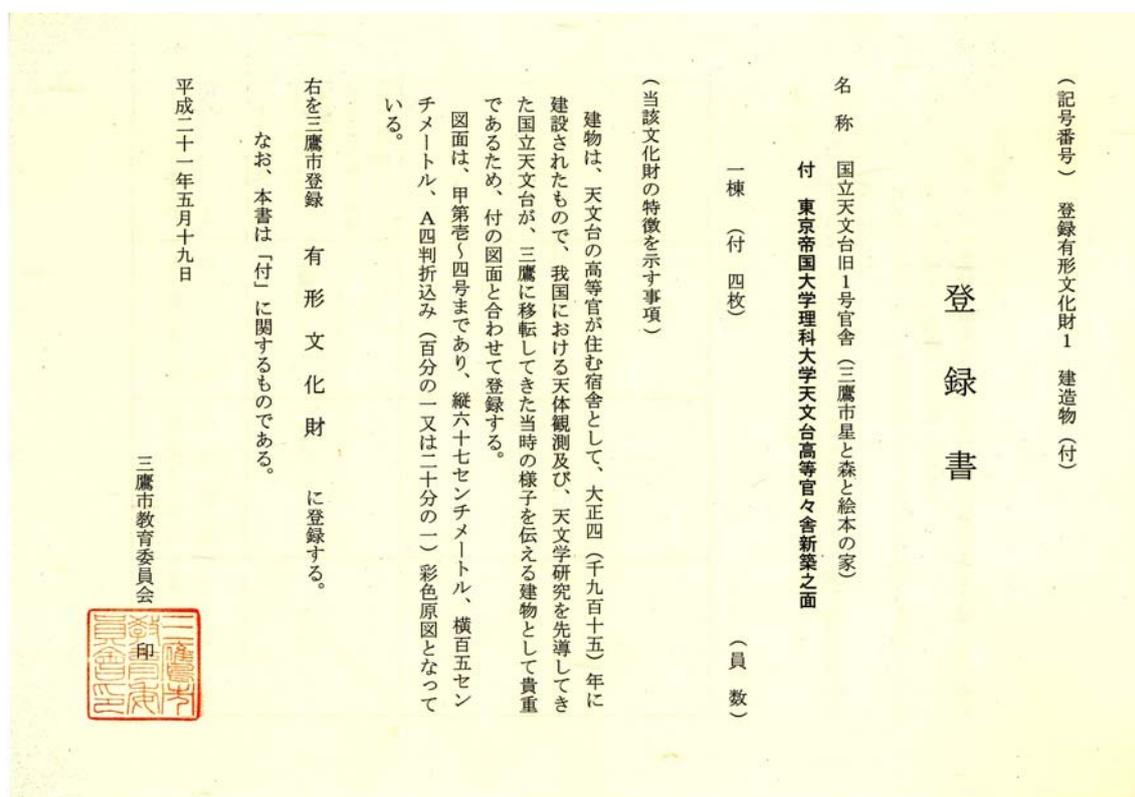


写真1 高等官が住む宿舎として、と修正された書面

三鷹市では、役目を終えて取り壊される運命であった、この1号官舎を大正初期の建物として貴重であることから、有形登録文化財として残し、有効に利用する手段として、耐震構造を現在の基準にした建て替え復元をして「三鷹市星と森と絵本の家」として活用している。この施設は国立天文台の中にあって、近在の子供たちが自然を満喫しながら絵本に親しめるよう種々の工夫で人気を博している。

この1号官舎が、三鷹市の登録有形文化財1号に指定されたので、記念の冊子が作成中であり、1号官舎の由来と歴史のような記事を依頼されて書いたものが次の文書である。

建物の由緒と歴史

東京天文台1号官舎の由緒と歴史を語るには、第1章1節の「天文台の環境と歴史概要・位置図」と多少重複するかもしれないが、東京天文台の歴史を簡単に述べておく必要がある。

天文学を研究するところはその性質上、常に国立天文台としての機能を有してきた。それは人類が行政組織をもつには必須の事項が天文学から求められるからである。人を集める際、軍隊を組織する際、何時、どこそこに集まれと指令を出すには、「何月何日何時に」、「どこに」という時刻と、場所を指定しなければならない。その「何月何日」という「暦」、何時にという「時刻」、「どこに」という「場所（経緯度）」を決める手段が天文学の観測に基づいているからである。

したがって、行政組織には必ず天文学を行う役人が必要で、古代エジプト、古代中国など文明があったところはどこでもそうであったように、日本では大和朝廷の頃から幕府の行政組織、現在の行政組織の中にも常に天文学を行うものがいた。江戸幕府が倒され、明治維新の混乱の中でもスムーズにはいかなかったが、この暦の編纂は途切れることはなかったのである。

江戸幕府の浅草天文台から東京天文台への移行は混乱を極め、複雑であったが、明治21年(1888年)内務省地理局、海軍観象台、東京大学天象台が統合され東京大学東京天文台が麻布区飯倉の海軍観象台の地に発足した。

麻布区飯倉の地は崖地で狭隘であり、また市街地にあったため明治42年(1909年)には当時の北多摩郡三鷹村への移転が決まり、三鷹村に73,284坪(最終的には約10万坪)の土地を購入した。しかし、明治37年(1904年)～38年(1905年)の日露戦争で日本は疲弊のどん底であり、三鷹への移転は容易に進まなかった。また、中央線、京王線の移転地の近くの駅の設置年を考えれば分かるように、当時の三鷹村大沢の地はとんでもない僻地であった。進んでこの地に赴任しようというものがいるはずもない。近くで一番古い駅は武蔵境で明治22年、吉祥寺駅が明治32年、調布駅が出来たのは大正2年のことであった。三鷹駅が設置されたのは昭和5年のことである。

やっと三鷹村への移転の工事が始まったのは大正3年のことである。1号官舎は高等官官舎として大正4年に建設されている。建設工事が始まったばかりの三鷹の地に高等官が引っ越してくるはずもない。1号官舎はまずは天文台側の工事担当者の合宿として使用されたのは当然であり、観測者用宿舎が観測者休憩所及職員合宿所として建設されたのは大正13年(1924年)のことであった。それ以前に大正10年(1921年)に工場、傭人宿舎並物置新築という記録がある。したがって1号官舎～7号官舎が大正3年から大正9年の間に建設さ

れ、1号、3号が高等官官舎であり、2号、4号～7号は判任官官舎であった。大正10年に建設された8号官舎～10号官舎（傭人官舎）は2軒長屋であった。

大正12年(1923年)に起きた関東大震災で麻布飯倉の東京天文台は壊滅的な被害を受け、それを機に一気に三鷹へ移転が進み、大正13年(1924年)9月1日には一応移転が終った。しかし、麻布飯倉の天文台の地は東京大学天文学教室として昭和30年代まで存続し、台長初め多くの先生方は東京大学天文学教室と併任であったから麻布を離れなかった。

昭和2年にはオレンジ色の瓦の瀟洒な真四角な11号～13号官舎が建設された。その後、台長官舎として14号官舎が建設された。

1号官舎はその使用形態の多くは若い研究者の合宿所として使用され、一家族が住んだことは2～3例であったようである。もう一つの高等官官舎であった3号官舎は、二つに引き家で分割され2軒の官舎として使用され、1号官舎も最後は引き家はされなかったが真ん中で間仕切りされ2軒の官舎として利用された。その後、長野県野辺山に電波観測所が出来、官舎在住のものが赴任した際、野辺山に官舎を造ったのでその分が倒され、順次減っていき、古くなった官舎は平成になって全てその使命を終えた。東京天文台時代、三鷹国際報時所の官舎を15号～20号として受け入れ、戦後21号から43号まで官舎が建設され、最も官舎が多かった時代には、3軒の長屋6世帯、3号が甲乙の2軒を含め47世帯が住んでいた。その他に官舎ではない天文台に勤務していた者の家が2軒あった。

東京天文台が三鷹村に移転した頃の近在の農家の写真、田畑の様子が写った写真があるが、大変な辺境の地であり、天文台職員は官舎住まいを余儀なくされたのであった。写真で見るとように近在の農家の家屋と官舎の違いは歴然である。天文台構内の官舎の人たちと周辺の住民とが融和するにはずいぶんと大変な時期があったと言い伝えられている。

とにかく、大正初期に高等官官舎として建てられた東京天文台1号官舎は、官舎が全廃された後、生き永らえて三鷹市の「星と森と絵本の家」として子供たちが楽しく過ごせる施設として余生を送ることになった。

東京天文台が三鷹に移転した頃の大沢の風景、当時の東京天文台の夜景などの写真を何点かご覧いただきたいと思う。

写真5は、戦前の東京天文台の建物・施設の配置図であり、三鷹村とあるから昭和15年(1940年)以前の様子であり、1号官舎は図の縮尺目盛の0～500の上の大きな建物である。



写真1 天文台南側の水田の風景



写真2 天文台南側の農家の風景



写真3 建替え前の大正時代の面影を残す1号官舎



写真4 昭和初期の夜間の天文台

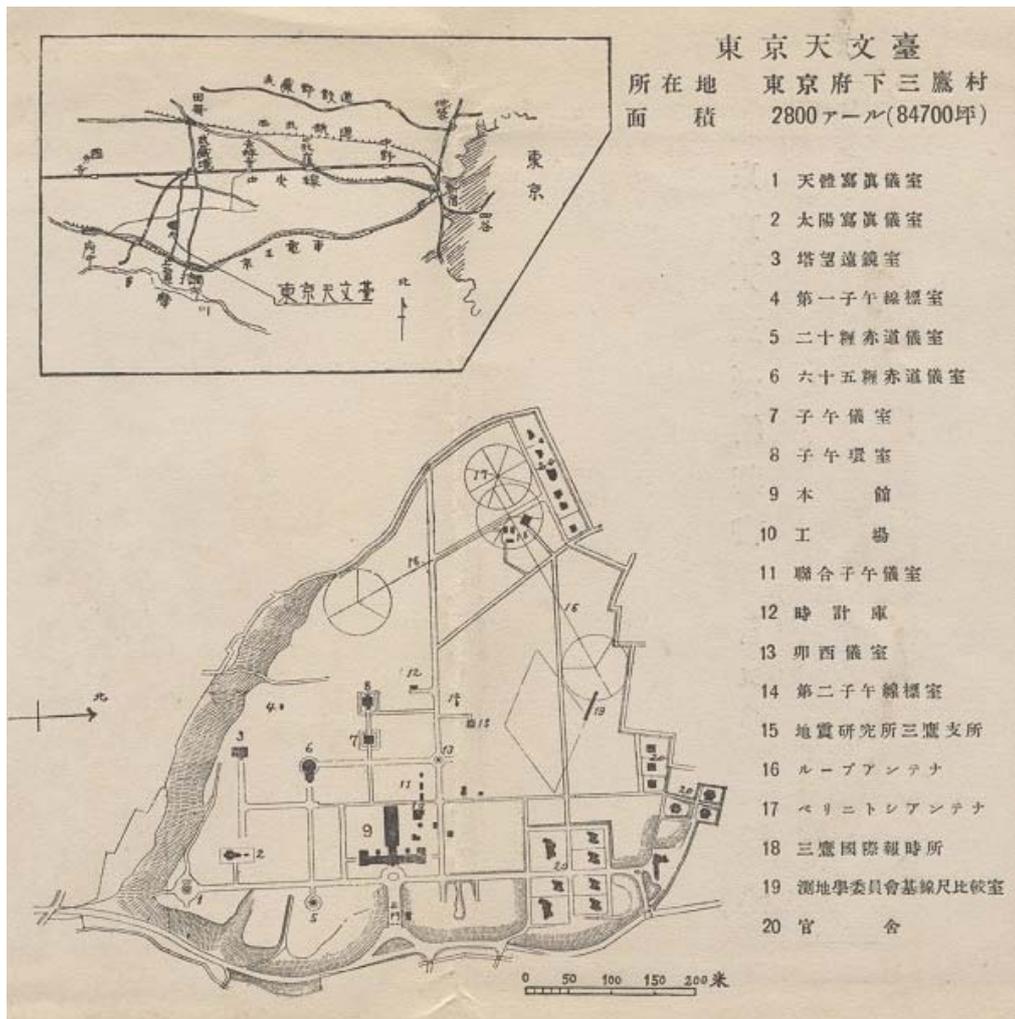


写真5 昭和15年(1940年)以前の東京天文台建物配置図